

青少年の対人イメージの因子的特質

筑波大学心理学系

加藤 隆 勝

長岡短期大学

堀 啓 造

横浜国立大学教育学部

高木 秀 明

家庭内暴力、校内暴力など青少年の対人行動のゆがみが大きな社会問題となっているが、一般的な対人行動は、自己イメージを含めた対人イメージによって大きく規定される。それゆえ、青少年の対人行動を理解するには、青少年がどのような対人イメージを持っているかを把握することが必要となる。とりわけ、青少年にとって身近な存在である父母、教師、友人、自分に対してどのようなイメージを持っているかを知ることは重要である。

従来、対人イメージの研究では、自由回答法、評定尺度法、形容詞チェックリスト法、SD (Semantic Differential)法、Q分類法などのさまざまな方法が用いられてきた。特に、SD法は Osgood (1952) が開発し、対人イメージ研究に利用して以来 (Osgood & Luria, 1954)、多くの研究者によって用いられてきている。しかし、対人イメージの因子を抽出して分析したものはあまり多くない。対人イメージの因子分析的研究としては、たとえば Osgood (1962)、Kuusinen (1969)、Warr & Haycock (1970)、Gault & Wang (1974) らのものがある程度である。日本人を被験者としたものでは、Osgood の他に、長島・藤原・原野・齋藤・堀 (1966, 1967) が中学生、高校生、大学生を対象に、また、田中 (1971)、鈴木 (1974) が小学生を対象に因子を抽出している。しかし、日本人を対象としたものは Osgood 以外いずれも評定対象として自己しか用いていない。しかも、これらの因子分析を用いた研究はいずれも因子抽出のみが目的となっており、具体的にイメージがどのようになっているか、プロフィールについての検討は発表されていない。また、この問題と関連して、小学生から中学生、高校生と発達するにつれ、イメージが質的、量的にどのように変化するかについての検討もなされていない。長島他 (1966, 1967) が同一尺度ではないが、中学生、高校生、大学生の自己イメージの因子の違いを比較した研究が注目される程度である。このように、対人イメージの

因子的特質に関しては教育心理学的な観点からみると検討すべき課題が残されたままとなっている。

なお、因子構造の変化に関しては多くの議論のあるところであるが、Osgood, May & Miron (1975) の概観によると、アメリカでは SD 因子は小学生から大学生まで「評価一潜在性一活動性」の3因子構造が変化しないとされている。このことからすると、対人イメージの因子構造も変化しないと考えられる。

また、これまで対人イメージ、特に自己イメージがその個人の適応状態と関係あることが指摘されてきた。本研究でも、対人イメージの因子的特質を検討した上で、さらに、それが被験者の持っている適応感とどう関連しているかを分析する。ここでいう適応感とは、個人が自己をよい状態にあると意識していることで、生活における安定感、充実感、生きがい感などを意味する (加藤・石川・田中・落合・高木・堀, 1981 a)。したがって適応感を持つものは心理的により健康な状態にあると考えられるので、適応感のないものよりも対人イメージがプラスの特質を持つと考えられる。そして、小学生から中学生、高校生となるにつれ対人イメージと適応感の関係が分化してくると考えられる。つまり、小学生では全体的に適応感のあるものはプラスのイメージになるが、高校生では特定のイメージ因子、特定の対象に対してプラスのイメージをもつようになると予想される。また、適応感と対人イメージの関係をみることにより、どの対人関係のどのイメージ因子が適応感にとってより重要であるかを明らかにすることができると思われる。

われわれはすでに対人イメージのプロフィールについては調査結果を発表 (加藤・石川・田中・落合・高木・堀, 1981 b) しているので、本研究では次の点について分析することを目的とした。すなわち、青少年の最も身近な存在である父、母、教師、友人、そして「私」についてのイメージを構成する因子を抽出し、小学生、中学生、高校生のもつ対人イメージの特質を発達別、性別に

検討し、5つの対人イメージ間の比較を行う。また適応感と対人イメージの関係を検討し、その発達的变化を実証的に明らかにする。

方 法

1. 対人イメージの測定項目

対人イメージの測定項目に関しては、加藤・高木・堀(1980)を参考にし、さらに従来の研究をふまえて対人イメージを測定する上で適切と思われる形容詞対を検討して、最終的には Table 2 に示す21対の形容詞対を選択した。これらの21対の形容詞対をランダムな順序に並び、左右の位置もランダムにして提示し、「父」、「母」、「好きな先生」、「同性の友だち」、「私」の5つの概念について6件法(たとえば、「まじめな—ふまじめな」に対しては「とてもまじめな」、「かなりまじめな」、「すこしまじめな」、「すこしふまじめな」、「かなりふまじめな」、「とてもふまじめな」の中からあてはまるものを1つ答えてもらい、それぞれの回答に対して6点から1点の得点を与えた)でそのイメージを測定した(加藤他, 1981b)。

2. 適応感の測定項目

適応感に関しては、大橋教育研究会(1979)が子どもの生活感情を調べるために用いた質問の中から3問を選択し、さらに1問追加して計4問(4件法)により測定した。その質問は以下の通りである。

- (1) あなたは、毎日の生活が楽しいと思いますか。
 1. とても、楽しいと思う。
 2. まあ、楽しいと思う。
 3. あまり、楽しくないと思う。
 4. まったく、楽しくないと思う。
- (2) あなたは、毎日自信をもって生活していますか。
 1. とても、自信をもって生活している。
 2. まあ、自信をもって生活している。
 3. すこし、自分はだめだと思って生活している。
 4. とても、自分はだめだと思って生活している。
- (3) あなたは、いつもものごとをいっしょうけんめいやろうとしていますか。
 1. いつも、いっしょうけんめいやろうとしている。
 2. まあ、いっしょうけんめいやろうとしている。
 3. あまり、やる気にならない。
 4. まったく、やる気にならない。
- (4) あなたは、いつもクラスや学校の人たちのために役立ちたいと思っていますか。
 1. いつも、役立ちたいと思っている。
 2. まあ、役立ちたいと思っている。
 3. あまり、役立ちたいとは思わない。
 4. まったく、役立ちたいとは思わない。

これらの4問のすべてに、肯定的な回答である1または2と答えた者を十分な適応感のある者(適応群)とし、それ以外の者、すなわち4問のうちいずれかにおいて否定的な回答である3または4が含まれる場合には十分な適応感に欠ける面がある者(非適応群)とした。つまり、適応群は生活における安定感、充実感、生きがい感などを持つ者のグループを意味し、非適応群は、適応群に入らないもの、つまり十分な安定感、充実感、生きがい感などに欠ける面を持つもののグループを意味している。

3. 調査対象および調査期間

調査は首都圏(東京都および横浜市内)の公立小学校(6校)5年生、首都圏の公立中学校(3校)2年生、都内の公立高校(2校)2年生を対象に実施した。調査対象者数の内訳は Table 1 に示してあるが、総計1,015名である。調査の実施期間は1980年10月~11月である。

Table 1 調査対象者数

	小学生	中学生	高校生	合計
男子	206	182	125	513
女子	197	180	125	502
合計	403	362	250	1,015

結 果

1. 対人イメージ測定項目の因子分析

対人イメージのプロフィールについてはすでに発表(加藤他, 1981b)しているのので、ここでは因子分析の結果について述べる。対人イメージ測定項目を概念別、発達段階別に主成分分析し、さらにバリマックス回転を行ったところ、それぞれがほぼ同一の因子構造をもつことが確認できた。そこで小・中・高校生をまとめ、さらに5概念も込みにした全体について、string out法(引っぱり出し法)によって相関行列を求め、主成分分析とバリマックス回転を行い4因子を抽出した。ただし、相関行列はstring out法によって求めたので、欠損データを含む被験者については、その被験者のデータをすべて除外することはせず、欠損データを含む概念についてのみ除外し、欠損データを含まない概念については分析に投入した。その結果、因子分析に使用したケースは4,395ケース(除外したケースは680ケース)であった。

因子分析の結果を Table 2 に示した。

第I因子は「まじめな—ふまじめな」、「けじめのある—けじめのない」、「上品な—下品な」、「責任感のある—責任感のない」、「しっかりした—たよらない」、「やる気

Table 2 対人イメージ測定項目の因子分析結果

項 目	因 子 負 荷 量				h ²
	I	II	III	IV	
1. まじめな—ふまじめな	.78	.03	.03	.11	.62
2. けじめのある—けじめのない	.76	.15	.04	.22	.65
3. 上品な—下品な	.70	.12	-.28	-.04	.59
4. 責任感のある—責任感のない	.69	.27	.11	.32	.66
5. しっかりした—たよりない	.68	.27	.10	.37	.68
6. やる気のある—やる気のない	.66	.39	.08	.25	.65
7. あかるい—くらい	.15	.76	-.03	.32	.70
8. 元気な—元気のない	.22	.74	.02	.11	.61
9. 自由な—きゅうくつな	.14	.69	-.21	.07	.54
10. たのしい—つまらない	.16	.69	-.08	.41	.68
11. 幸福な—不幸な	.27	.67	-.06	.18	.56
12. きびしい—やさしい	.18	-.15	.73	-.13	.60
13. いばる—したがう	-.10	.11	.69	-.28	.57
14. 考えが古い—考えが新しい	-.04	-.46	.57	.03	.54
15. あたたかい—つめたい	.19	.33	-.18	.69	.65
16. すきな—きらいな	.18	.38	-.17	.67	.66
17. 思いやりのある—自分勝手な	.38	.11	-.27	.66	.66
18. 尊敬できる—尊敬できない	.51	.25	.07	.52	.60
19. 協力的な—対立的な	.48	.45	-.10	.32	.54
20. 公平な—不公平な	.48	.33	-.22	.35	.51
21. おちついた—いらいらした	.40	.13	-.32	.47	.50
因子負荷量の2乗和	4.37	3.76	1.79	2.86	12.78
寄与率 (%)	20.81	17.90	8.52	13.62	60.85

(注) 小学、中学、高校生全体について、5概念を込みにした因子分析の結果である。

のある—やる気のない」の項目において負荷量が高いので〈誠実性〉の因子と命名された。

第II因子は「あかるい—くらい」、「元気な—元気のない」、「自由な—きゅうくつな」、「たのしい—つまらない」、「幸福な—不幸な」の項目において負荷量が高いので〈明朗性〉の因子と命名された。

第III因子は「きびしい—やさしい」、「いばる—したがう」、「考えが古い—考えが新しい」の項目において負荷量が高いので〈権威性〉の因子と命名された。

第IV因子は「あたたかい—つめたい」、「すきな—きらいな」、「思いやりのある—自分勝手な」の項目において負荷量が高いので〈あたたかさ〉の因子と命名された。

2. 対人イメージの発達傾向

先に得た4因子に関して因子得点を算出し、すべての概念について欠損値のない被験者のみを選択したところ605名の被験者が選ばれた。この605名の被験者群について発達段階別、性別、概念別に因子得点の平均値と標準偏差を計算し、発達差および性差を検定した結果を

Table 3 に示した。また平均因子得点のプロフィールを因子別に Fig. 1~4 に示した。次にこれらの図表によって対人イメージの発達の特徴を検討する。

(1) 「父」のイメージ

第I因子の〈誠実性〉では、小・中学生の因子得点は高く、高校生の因子得点は中間程度である。男子では小・中学生と高校生の間に有意差がみられ、女子では中学生と高校生の間に有意差がみられる。

第II因子の〈明朗性〉では、小・中・高校生とも因子得点が低いが、特に高校生の因子得点が低い。男女とも小・中学生と高校生の間に有意差がみられる。

第III因子の〈権威性〉では、小・中・高校生とも因子得点が高い。発達の傾向としては小学、中学、高校と進むにつれて因子得点が高くなっており、男子では小学生と中・高校生の間で有意差がみられ、女子では小・中・高校生の間ですべて有意差がみられる。

第IV因子の〈あたたかさ〉では、小学生の因子得点は高く、中学生と高校生男子の因子得点は中間程度であ

Table 3 対人イメージ因子得点

概念	因子	N	小学生		中学生		高校生		発達差						性差			
			男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子			女子			小学生	中学生	高校生	
			小一	中一	高一	小一	中一	高一	小一	中一	高一	小一	中一	高一				
父	I	M	0.34	0.15	0.46	0.34	0.06	-0.01		**	*		*					
		SD	0.71	0.82	0.84	0.84	0.94	1.04										
	II	M	-0.21	-0.12	-0.37	-0.29	-1.04	-0.65		**	**		**	**				*
		SD	0.71	0.79	0.84	0.91	1.14	0.98										
III	M	0.31	0.22	0.67	0.54	0.72	0.83	**		**	*	*	**					
	SD	0.91	0.85	0.97	0.99	0.89	1.02											
IV	M	0.42	0.55	0.01	0.04	-0.08	-0.25	**		**	**	*	**					
	SD	0.78	0.90	1.12	1.00	1.04	1.12											
母	I	M	0.65	0.35	0.16	0.21	0.03	-0.03	**		**		*	**	**			
		SD	0.67	0.65	0.86	0.82	0.72	0.73										
	II	M	-0.14	-0.06	-0.34	-0.01	-0.83	-0.47		**	**		**	**		**	**	
		SD	0.76	0.72	0.91	0.80	0.85	0.81										
III	M	-0.11	-0.16	0.05	0.14	0.17	0.33				*		**					
	SD	0.92	0.90	0.93	1.01	0.76	1.01											
IV	M	0.18	0.51	-0.16	0.39	0.11	0.31	*	*					**	**			
	SD	0.88	0.76	0.89	0.86	0.94	0.94											
すぎな先生	I	M	0.59	0.53	0.22	0.42	-0.01	0.33	**		**							**
		SD	0.72	0.75	1.04	0.78	1.00	0.61										
	II	M	0.20	0.27	-0.11	0.33	-0.34	-0.06	*		**		**	**		**	*	
		SD	0.69	0.62	1.22	0.94	1.04	0.78										
III	M	0.25	0.10	0.56	0.24	0.29	0.24									*		
	SD	0.99	0.95	1.13	0.94	0.85	1.01											
IV	M	0.15	0.63	0.12	0.30	-0.11	0.15				**		**	**				
	SD	0.79	0.70	1.02	0.85	0.92	0.82											
同性の友だち	I	M	-0.19	-0.02	-0.36	-0.14	-0.96	-0.29		**	**							**
		SD	0.95	0.87	1.15	0.88	1.12	0.87										
	II	M	0.59	0.54	0.48	0.57	0.23	0.20		*	**		**	**				
		SD	0.61	0.61	0.85	0.76	0.96	0.77										
III	M	-0.44	0.77	-0.33	-0.64	-0.26	-0.41					*	**	**	**	**		
	SD	0.78	0.72	0.96	0.71	0.62	0.64											
IV	M	0.01	0.34	-0.25	0.03	-0.06	0.17				**			**	*			
	SD	0.69	0.55	1.02	0.77	0.86	0.81											
私	I	M	-0.30	-0.34	-0.39	-0.39	-0.78	-0.49		*	**							*
		SD	0.92	0.82	1.14	0.88	1.14	0.67										
	II	M	0.40	0.47	0.20	0.42	-0.46	-0.07		**	**		**	**				*
		SD	0.89	0.83	1.19	0.89	1.32	1.06										
III	M	-0.48	-0.49	-0.15	-0.63	-0.45	-0.40	*	*						**			
	SD	0.91	0.68	1.05	0.75	0.89	0.76											
IV	M	-0.40	-0.29	-0.76	-0.84	-0.60	-0.90	*	*		**		**				*	
	SD	0.78	0.82	1.15	1.01	0.90	0.86											

(注1) 発達差は分散分析による多重比較. *p<.05, **p<.01

(注2) 性差はt検定. *p<.05, **p<.01

り、高校生女子の因子得点は低くなっている。男子では小学生と中・高校生の間有意差がみられ、女子では小・中・高校生の間すべて有意差がみられる。

小学生男子は「父」に対してあたたかく、誠実であるが、やや権威的でもあるというイメージを抱えており、小学生女子はあたたかいというイメージを持っている。中学生男子は「父」に対してかなり権威的であり、誠実であるが、あまり明るくはないというイメージを持っており、中学生女子もほぼ同様のイメージを持っている。高校生においては男女とも「父」に対してとても権威的で、しかも明るくないというイメージを持っている。小

学、中学、高校と進むにつれて「父」に対するイメージは権威的で明るくないという方向へと変化している。

(2) 「母」のイメージ

第I因子の〈誠実性〉では、小・中学生の因子得点は高く、高校生の因子得点は中間程度である。男子では小学生と中・高校生の間有意差がみられ、女子では小・中学生と高校生の間に有意差がみられる。

第II因子の〈明朗性〉では、小学生と中学生女子の因子得点は中間程度であり、中学生男子と高校生の因子得点は低くなっている。男女とも小・中学生と高校生の間に有意差がみられる。

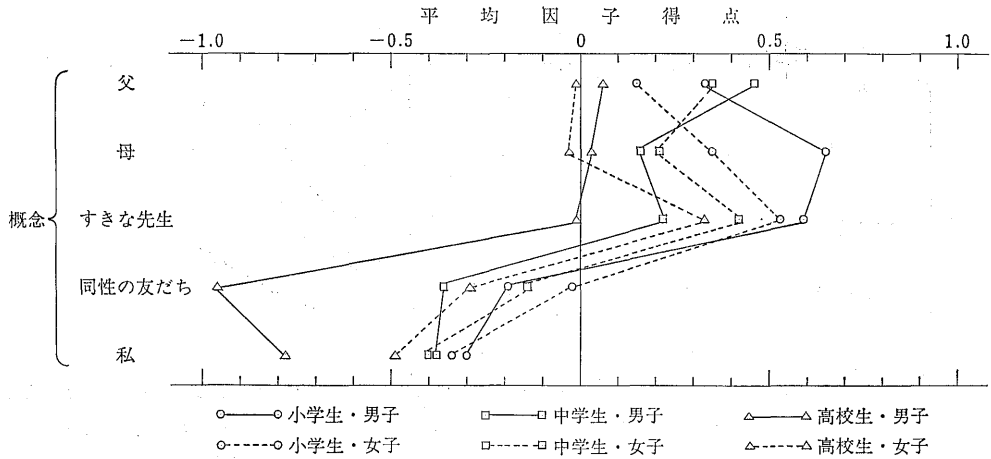


Fig. 1 第I因子（誠実性）の平均因子得点プロフィール

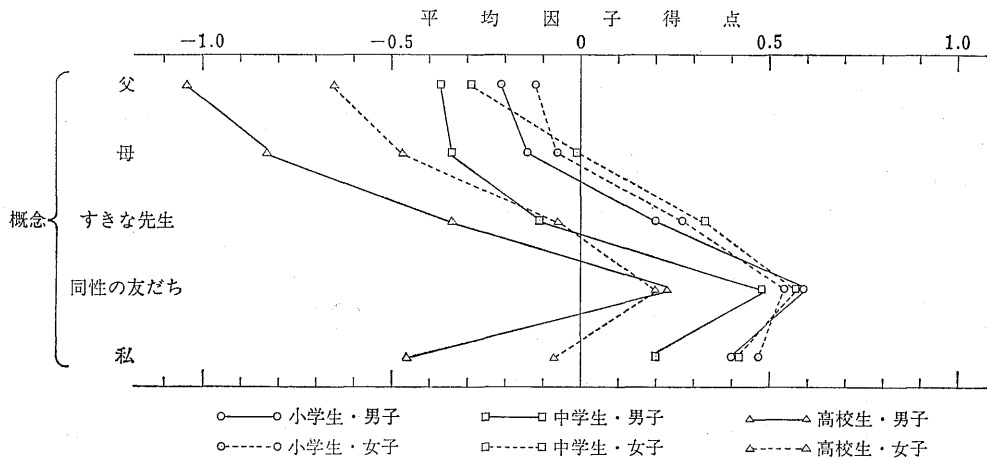


Fig. 2 第II因子（明朗性）の平均因子得点プロフィール

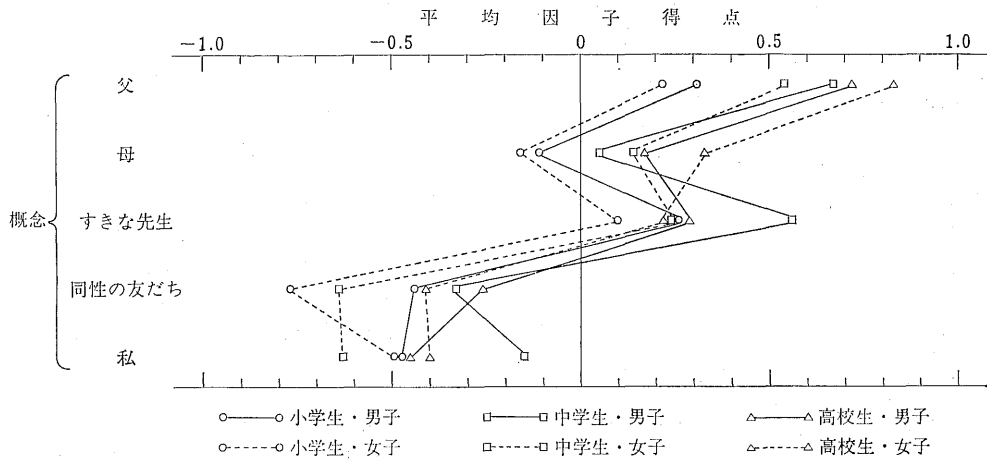


Fig. 3 第III因子（権威性）の平均因子得点プロフィール

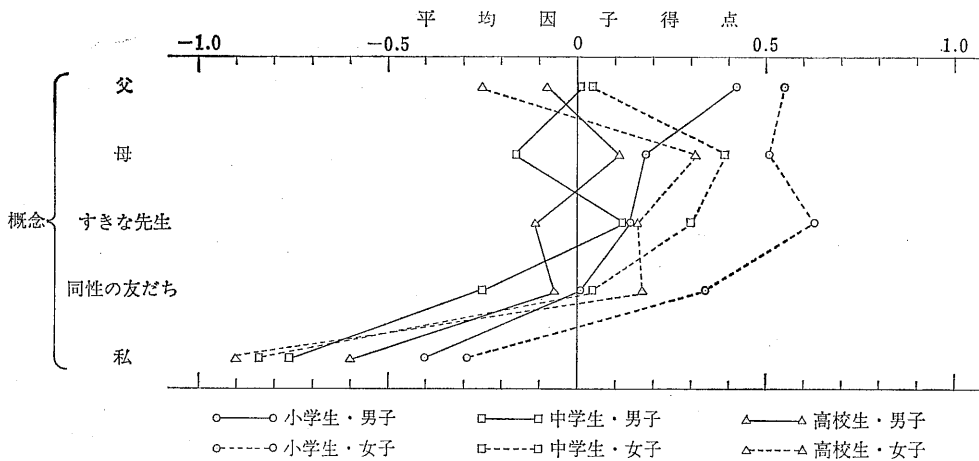


Fig. 4 第IV因子(あたたかさ)の平均因子得点プロフィール

第III因子の〈権威性〉では、小・中学生の因子得点は中間程度であり、高校生の因子得点はやや高い。男子では有意な発達差はみられないが、女子では小学生と中・高校生の間に有意差が認められる。

第IV因子の〈あたたかさ〉では、男子の因子得点は中間程度であり、女子の因子得点は高くなっている。発達の的には、男子では中学生の因子得点が小学生や高校生よりも有意に低くなっているが、女子では有意な発達差はみられない。

小学生では、男子は「母」について誠実であるというイメージを持っており、女子は誠実であたたかいというイメージを持っている。中学生になると、男子の「母」に対するイメージは明るくないというイメージに変るが、女子にはあたたかいというイメージが残っている。高校生になると、男子の「母」に対する明るくないというイメージがさらに強まり、女子ではあたたかいというイメージに権威的で明るくないというイメージが加わる。「母」に対するイメージも発達段階が進むにつれて変化している。

(3) 「すきな先生」のイメージ

第I因子の〈誠実性〉では、高校生男子を除いて因子得点が高くなっている。発達の的には、男子では小学生の因子得点が中・高校生よりも有意に高くなっているが、女子では有意な発達差はみられない。

第II因子の〈明朗性〉では、小学生と中学生女子の因子得点は高く、中学生男子と高校生女子の因子得点は中間程度であり、高校生男子の因子得点は低くなっている。男子では小学生と中・高校生の間に有意差がみられ、女子では小・中学生と高校生の間に有意差がみられる。

第III因子の〈権威性〉では、小・中・高校生とも因子

得点が高く、特に中学生男子の因子得点が高くなっている。しかし男女とも有意な発達差はみられない。

第IV因子の〈あたたかさ〉では、高校生男子を除いて因子得点が高くなっている。男子では有意な発達差はみられないが、女子では小学生の因子得点が中・高校生よりも有意に高くなっている。

小学生男子は「すきな先生」に対して誠実だというイメージを持っており、小学生女子は誠実であたたかいというイメージを持っている。ところが男子は中学生になると、「すきな先生」に対して権威的というイメージを持つようになり、小学生男子とは違ったイメージを持っている。それに対して中学生女子の「すきな先生」に対するイメージは誠実で明るく、あたたかいというイメージであり、小学生女子とあまり変わらない。高校生になると、男子は「すきな先生」に対してあまり明るくないというイメージを持ち、女子は誠実であるというイメージを持っている。「すきな先生」に対するイメージは、女子では発達の的にあまり変化しないが、男子では小学、中学、高校と進むにつれて複雑な変化を示している。

(4) 「同性の友だち」のイメージ

第I因子の〈誠実性〉は、小学生女子を除いて因子得点が低くなっている。発達の的には、男子では高校生の因子得点が小・中学生よりも有意に低くなっているが、女子では有意な発達差はみられない。

第II因子の〈明朗性〉では、小・中・高校生とも因子得点が高い。発達の的には、男女とも小・中学生の因子得点が高校生よりも有意に高くなっている。

第III因子の〈権威性〉では、小・中・高校生とも因子得点が低い。男子では有意な発達差はみられないが、女子では小・中学生の因子得点が高校生よりも低くなっている。

第Ⅳ因子の〈あたたかさ〉では、小学生女子と高校生女子の因子得点は高く、小学生男子、中学生女子、高校生男子の因子得点は中間程度であり、中学生男子の因子得点は低くなっている。男子では有意な発達差はみられないが、女子では小学生と中学生の間に有意差が認められる。

小学生では、男子は「同性の友だち」に対して明るく、権威的でないというイメージを持っており、女子は明るく、権威的でなく、あたたかいというイメージを持っている。中学生では、男子は「同性の友だち」に対して明るく、権威的でないが、誠実でもないというイメージを持っており、女子は明るく、権威的でないというイメージを持っている。高校生になると、男子は「同性の友だち」に対して全く誠実でないというイメージを持っており、女子は権威的でないというイメージを持っている。「同性の友だち」に対する男子のイメージは、中学、高校と進むにつれて不誠実であるというイメージが強くなっている。女子のイメージは発達のあまり変化していない。

(5) 「私」のイメージ

第Ⅰ因子の〈誠実性〉では、小・中・高校生とも因子得点が低い。発達のには、男子では高校生の因子得点が小・中学生よりも有意に低くなっているが、女子では有意な発達差はみられない。

第Ⅱ因子の〈明朗性〉では、小・中学生の因子得点は高く、高校生女子の因子得点は中間程度であり、高校生男子の因子得点は低い。発達のには、男女とも小・中学生の因子得点が高校生よりも有意に高くなっている。

第Ⅲ因子の〈権威性〉では、小・中・高校生とも因子得点が低い。男子では小学生と高校生の因子得点が中学生よりも有意に低くなっているが、女子では有意な発達差はみられない。

第Ⅳ因子の〈あたたかさ〉では、小・中・高校生とも因子得点が低い。男子では中学生の因子得点が小学生よりも有意に低く、女子では中・高校生の因子得点が小学生よりも有意に低くなっている。

「私」のイメージは、小学生では男女とも明るく、権威的でなく、誠実さやあたたかさも低くなっている。中学生では、あたたかなく、誠実でもないという自己イメージは男女に共通しているが、さらに女子には明るく、権威的でないというイメージも加わる。高校生では、誠実でなく、あたたかなく、権威的でないという自己イメージは男女に共通し、さらに男子には明るくないというイメージが加わる。青年期に進むにつれて、自己イメージは悪くなる傾向を示している。

3. 対人イメージの性差

Table 3 と Fig. 1~4 によって対人イメージの性差を検討する。

「父」のイメージでは、高校生男子は高校生女子よりも〈明朗性〉が有意に低くなっている。小・中学生には有意な性差はみられない。

「母」のイメージでは、小学生男子は小学生女子よりも〈誠実性〉が有意に高く、〈あたたかさ〉が有意に低くなっている。中学生男子は中学生女子よりも〈明朗性〉と〈あたたかさ〉が有意に低くなっている。高校生男子は高校生女子よりも〈明朗性〉が有意に低くなっている。

「すきな先生」のイメージでは、小学生女子は小学生男子よりも〈あたたかさ〉が有意に高くなっている。中学生男子は中学生女子よりも〈明朗性〉が有意に低く、〈権威性〉が有意に高くなっている。高校生男子は高校生女子よりも〈誠実性〉と〈明朗性〉が有意に低くなっている。

「同性の友だち」のイメージでは、小学生においても中学生においても女子は男子よりも〈権威性〉が有意に低く、〈あたたかさ〉が有意に高くなっている。高校生男子は高校生女子よりも〈誠実性〉が有意に低くなっている。

「私」のイメージでは、中学生女子は中学生男子よりも〈権威性〉が有意に低くなっている。高校生男子は高校生女子よりも〈誠実性〉、〈明朗性〉が有意に低く、〈あたたかさ〉が有意に高くなっている。小学生には有意な性差はみられない。

以上をまとめると、1, 2の例外はあるが男子の対人イメージは女子よりも〈権威性〉が高く、女子の対人イメージは男子よりも〈誠実性〉、〈明朗性〉、〈あたたかさ〉が高いことが示されている。

4. 対人イメージ間の比較

対人イメージ間の差の検定結果を Table 4 に示した。この表と Table 3 および Fig. 1~4 によって対人イメージ間の比較を行う。

(1) 「父」と「母」のイメージの比較

小学生は男女とも「父」を「母」よりも権威的であると感じており、さらに男子は「父」を「母」よりもあたたかく、「母」を「父」よりも誠実であると感じている。中学生においても「父」を「母」よりも権威的であるとみるイメージは男女に共通しており、さらに男子には「父」を「母」よりも誠実とみるイメージ、女子には「母」を「父」よりも明るく、あたたかいとみるイメージが存在する。高校生も男女とも「父」を「母」よりも権威的であると感じており、さらに女子は「母」を「父」よりもあたたかいと感じている。

「父」は「母」よりも権威的であるというイメージが一般的にみられる。

(2) 「父」と「すきな先生」のイメージの比較

小学生は男女とも「すきな先生」を「父」よりも誠実

Table 4 対人イメージ間の差の検定結果

発達段階	性別	因子	父-母	父- すきな先生	父- 同性の友 だち	父-私	母- すきな先生	母- 同性の友 だち	母-私	すきな先生- 同性の友 だち	すきな先生- 私	同性の友 だち-私	
小学	男子	I	<<	<	>>	>>		>>	>>	>>	>>		
		II		<<	<<	<<	<<	<<	<<	<<	<		
		III	>>		>>	>>	<<	>>	>>	>>	>>		
		IV	>	>	>>	>>			>>		>>	>>	
	女子	I		<<		>>		>>	>>	>>	>>	>>	>>
		II		<<	<<	<<	<<	<<	<<	<<	<		
		III	>>		>>	>>	<	>>	>>	>>	>>	<	
		IV				>>			>>	>>	>>	>>	>>
中学	男子	I	>		>>	>>		>>	>>	>>	>>		
		II			<<	<<		<<	<<	<<	<		
		III	>>		>>	>>	<<	>		>>	>>		
		IV				>>			>>	>	>>	>>	
	女子	I			>>	>>		>>	>>	>>	>>	>>	>
		II	<	<<	<<	<<	<<	<<	<<	<<			
		III	>>	>	>>	>>		>>	>>	>>	>>		
		IV	<			>>		>	>>		>>	>>	>>
高校	男子	I			>>	>>		>>	>>	>>	>>		
		II		<<	<<	<<	<<	<<	<	<<		>>	
		III	>>	>>	>>	>>		>>	>>	>>	>>		
		IV				>>			>>		>>	>>	
	女子	I		<		>>	<		>>	>>	>>		
		II		<<	<<	<<	<	<<	<				
		III	>>	>>	>>	>>		>>	>>	>>	>>		
		IV	<<	<	<	>>			>>		>>	>>	>>

(注) 分散分析による多重比較。>は5%水準の有意差、>>は1%水準の有意差があることを示す。

で、明るいと感じており、さらに男子は「父」を「すきな先生」よりもあたたかいと感じている。中学生男子は「父」と「すきな先生」との間に有意な差を感じていない。中学生女子と高校生の男女は「父」を「すきな先生」よりも権威的であると感じており、「すきな先生」を「父」よりも明るいと感じている。さらに高校生女子は「すきな先生」を「父」よりも誠実で、あたたかいと

感じている。

「すきな先生」は「父」よりも明るいというイメージが一般的にみられる。

(3) 「父」と「同性の友だち」のイメージの比較

小学生は男女とも「父」を「同性の友だち」よりも権威的であると感じており、「同性の友だち」を「父」よりも明るいと感じている。さらに男子は「同性の友だち

ち」を「父」よりも誠実で、あたたかいと感じている。中学生は男女とも「父」を「同性の友だち」よりも権威的で、誠実であると感じており、「同性の友だち」を「父」よりも明るく感じている。高校生においては「父」を「同性の友だち」よりも権威的であるとみるイメージと、「同性の友だち」を「父」よりも明るく感じるイメージとは男女に共通しており、さらに男子には「父」を「同性の友だち」よりも誠実とみるイメージ、女子には「同性の友だち」を「父」よりもあたたかいとみるイメージが存在する。

「父」は「同性の友だち」よりも権威的で、誠実であり、「同性の友だち」は「父」よりも明るくというイメージが一般的にみられる。

(4) 「父」と「私」のイメージの比較

すべてのグループ、因子において一貫した有意差がみられ、「父」は「私」よりも権威的、誠実で、あたたかく、「私」は「父」よりも明るくというイメージが持たれている。

(5) 「母」と「すきな先生」のイメージの比較

小学生は男女とも「すきな先生」を「母」よりも明るく、権威的であると感じている。中学生においては、男子は「すきな先生」を「母」よりも権威的であると感じており、女子は「すきな先生」を「母」よりも明るく感じている。高校生は男女とも「すきな先生」を「母」よりも明るく感じており、さらに女子は「すきな先生」を「母」よりも誠実であると感じている。

「すきな先生」は「母」よりも明るくというイメージが一般的にみられる。

(6) 「母」と「同性の友だち」のイメージの比較

小、中学生は男女とも「母」を「同性の友だち」よりも権威的で、誠実であると感じており、「同性の友だち」を「母」よりも明るく感じている。さらに中学生女子は「母」を「同性の友だち」よりもあたたかいと感じている。高校生は男女とも「母」を「同性の友だち」よりも権威的であると感じており、「同性の友だち」を「母」よりも明るく感じている。さらに男子は「母」を「同性の友だち」よりも誠実であると感じている。

「母」は「同性の友だち」よりも権威的で、誠実であり、「同性の友だち」は「母」よりも明るくというイメージが一般的にみられる。

(7) 「母」と「私」のイメージの比較

中学生男子の第Ⅲ因子を除き、すべてのグループ、因子で一貫した有意差がみられ、「母」は「私」よりも権威的、誠実で、あたたかく、「私」は「母」よりも明るくというイメージが持たれている。

(8) 「すきな先生」と「同性の友だち」のイメージの比較

小学生は男女とも「すきな先生」を「同性の友だち」

よりも誠実で、権威的であると感じており、「同性の友だち」を「すきな先生」よりも明るく感じている。さらに女子は「すきな先生」を「同性の友だち」よりもあたたかいと感じている。中、高校生は男女とも「すきな先生」を「同性の友だち」よりも誠実で、権威的であると感じている。さらに中学生男子は「すきな先生」を「同性の友だち」よりもあたたかく、「同性の友だち」を「すきな先生」よりも明るく感じており、高校生男子も「同性の友だち」を「すきな先生」よりも明るく感じている。

「すきな先生」は「同性の友だち」よりも誠実で、権威的であり、「同性の友だち」は「すきな先生」よりも明るくというイメージが一般的にみられる。

(9) 「すきな先生」と「私」のイメージの比較

中学生女子と高校生男女の第Ⅱ因子を除き、すべてのグループ、因子で一貫した有意差がみられ、「すきな先生」は「私」よりも権威的、誠実で、あたたかいというイメージが持たれている。また小学生男女と中学生男子には「私」が「すきな先生」よりも明るくというイメージもみられる。

(10) 「同性の友だち」と「私」のイメージの比較

小学生は男女とも「同性の友だち」を「私」よりもあたたかいと感じており、さらに女子は「同性の友だち」を「私」よりも誠実であり、「私」を「同性の友だち」よりも権威的であると感じている。中学生も男女とも「同性の友だち」を「私」よりもあたたかいと感じており、さらに女子は「同性の友だち」を「私」よりも誠実であると感じている。高校生も男女とも「同性の友だち」を「私」よりもあたたかいと感じており、さらに男子は「同性の友だち」を「私」よりも明るく感じている。

「同性の友だち」は「私」よりもあたたかいというイメージが一般的にみられる。

以上をまとめると、〈誠実性〉では、父、母、先生が高く、友人や私よりも誠実であるとみられている。〈明朗性〉では、友人と私が最も明るく、次いで先生であり、父と母の明朗性は最も低いとみられている。〈権威性〉では、父が最も権威的であり、次いで先生、母の順に権威性が低くなり、友人と私は最も権威的でないとみられている。〈あたたかさ〉では、父、母、先生、友人が同程度にあたたかく、私よりもあたたかいとみられている。

5. 適応群、非適応群の対人イメージ

方法の2で説明した質問に対する回答によって各被験者群を適応群と非適応群に分け、それぞれの因子得点の平均値と標準偏差を算出し、適応群と非適応群の差を検定した結果を Table 5 に示した。この表によって適応群と非適応群の対人イメージを比較する。

Table 5 適応群, 非適応群の対人イメージ因子得点

概念	因子	小学生		中学生		高校生		校生子		適応群-非適応群の差		
		男子	女子	男子	女子	男子	女子	適応群	非適応群	小学生	中学生	
父	I	M	0.44	0.13	0.52	0.40	0.35	0.33	0.04	0.06	-0.32	0.14
		SD	0.74	0.59	0.75	0.93	0.89	0.78	0.65	1.03	1.15	0.96
	II	M	-0.15	-0.33	-0.19	-0.59	-0.06	-0.58	-0.77	-1.15	-1.03	-0.82
		SD	0.70	0.73	0.77	0.93	0.80	0.97	0.88	1.21	1.03	0.92
	III	M	0.17	0.60	0.73	0.59	0.49	0.61	0.81	0.69	0.99	0.74
		SD	0.92	0.84	0.92	1.02	1.05	0.92	0.96	0.87	1.08	0.99
	IV	M	0.44	0.36	0.37	0.17	0.19	-0.15	0.06	-0.13	0.05	-0.41
		SD	0.71	0.92	0.88	1.41	1.41	1.27	1.07	1.07	1.14	1.09
母	I	M	0.76	0.43	0.49	0.03	0.37	-0.10	0.28	0.12	-0.02	0.00
		SD	0.59	0.77	0.55	0.74	0.68	0.88	0.64	0.76	0.69	0.76
	II	M	-0.05	-0.33	0.09	-0.39	-0.14	-0.58	0.16	-0.22	-0.70	-0.34
		SD	0.72	0.83	0.67	0.73	0.85	0.94	0.68	0.84	0.86	0.79
	III	M	-0.25	0.17	-0.20	0.08	0.03	0.06	0.09	0.20	0.17	0.18
		SD	0.88	0.94	0.87	0.95	0.96	0.91	1.02	0.60	0.82	0.92
	IV	M	0.21	0.11	0.63	0.26	-0.31	0.40	0.39	-0.10	0.19	0.49
		SD	0.79	1.04	0.55	1.06	0.71	1.07	0.83	1.00	0.91	1.02
すぎな先生	I	M	0.68	0.42	0.50	0.43	0.47	0.35	-0.01	-0.01	0.27	0.36
		SD	0.67	0.79	0.76	1.02	0.80	0.75	0.79	1.08	0.62	0.61
	II	M	0.33	-0.08	0.34	0.11	0.02	-0.26	0.51	0.10	-0.12	-0.12
		SD	0.64	0.71	0.59	0.64	1.14	1.31	0.79	1.07	0.93	1.07
	III	M	0.13	0.51	0.13	0.01	0.63	0.46	0.29	0.19	0.42	0.33
		SD	0.94	1.05	0.98	0.87	1.14	1.13	0.91	0.98	0.74	0.89
	IV	M	0.15	0.13	0.70	0.48	0.04	0.21	0.30	-0.06	-0.12	0.27
		SD	0.68	0.99	0.65	0.78	1.01	1.04	0.86	0.84	0.95	0.91
同性の友だち	I	M	-0.06	-0.48	-0.01	-0.03	-0.07	-0.72	-0.09	-0.19	-0.99	-0.42
		SD	0.94	0.92	0.93	0.74	0.93	1.29	0.94	0.81	1.17	1.11
	II	M	0.60	0.56	0.58	0.44	0.34	0.66	0.77	0.32	0.27	0.22
		SD	0.54	0.74	0.55	0.72	0.75	0.93	0.62	0.85	0.95	0.97
	III	M	-0.48	-0.37	-0.73	-0.86	-0.61	0.02	-0.70	-0.56	-0.20	-0.28
		SD	0.80	0.74	0.75	0.65	0.83	1.01	0.76	0.66	0.54	0.65
	IV	M	0.10	-0.17	0.34	0.33	-0.14	-0.39	0.08	-0.04	0.10	-0.13
		SD	0.68	0.67	0.55	0.58	0.70	1.31	0.76	0.79	0.92	0.84
私	I	M	-0.13	-0.67	-0.12	-0.83	0.01	-0.87	-0.22	-0.60	-0.55	-0.53
		SD	0.88	0.91	0.72	0.83	0.93	1.18	0.66	1.05	1.04	1.16
	II	M	0.57	0.05	0.55	0.27	0.57	-0.26	0.71	0.06	0.02	-0.65
		SD	0.72	1.09	0.65	1.13	0.83	1.40	0.70	0.97	1.02	1.38
	III	M	-0.47	-0.50	-0.51	-0.46	-0.10	-0.21	-0.59	-0.68	-0.20	-0.55
		SD	0.92	0.90	0.66	0.73	1.02	1.10	0.67	0.83	0.97	0.84
	IV	M	-0.38	-0.43	-0.15	-0.61	-0.59	-0.99	-0.56	-1.19	-0.52	-0.64
		SD	0.78	0.79	0.77	0.85	0.98	1.30	0.97	0.95	1.10	0.82

(注) 適応群-非適応群の差はt検定。* p<.05, ** p<.01

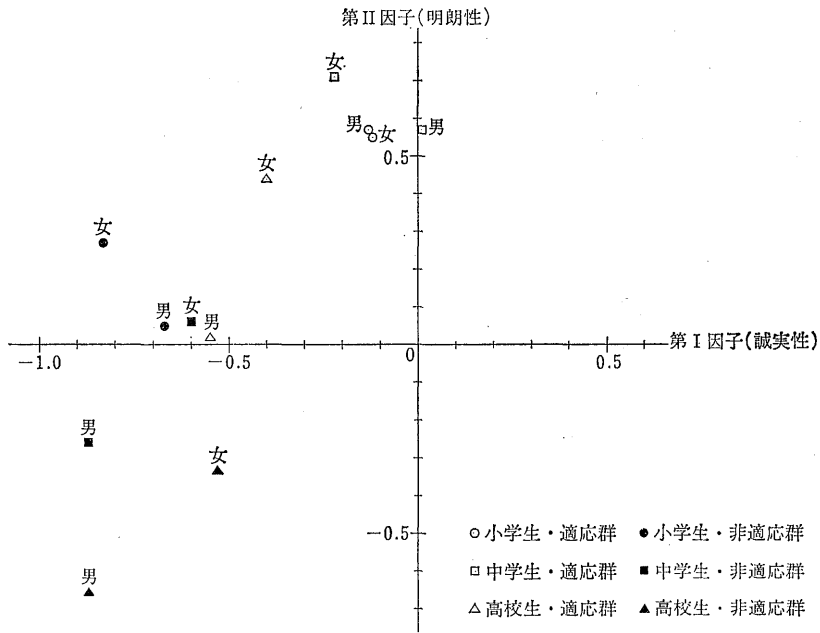


Fig. 5 「私」のイメージの平面布置（第I因子×第II因子）

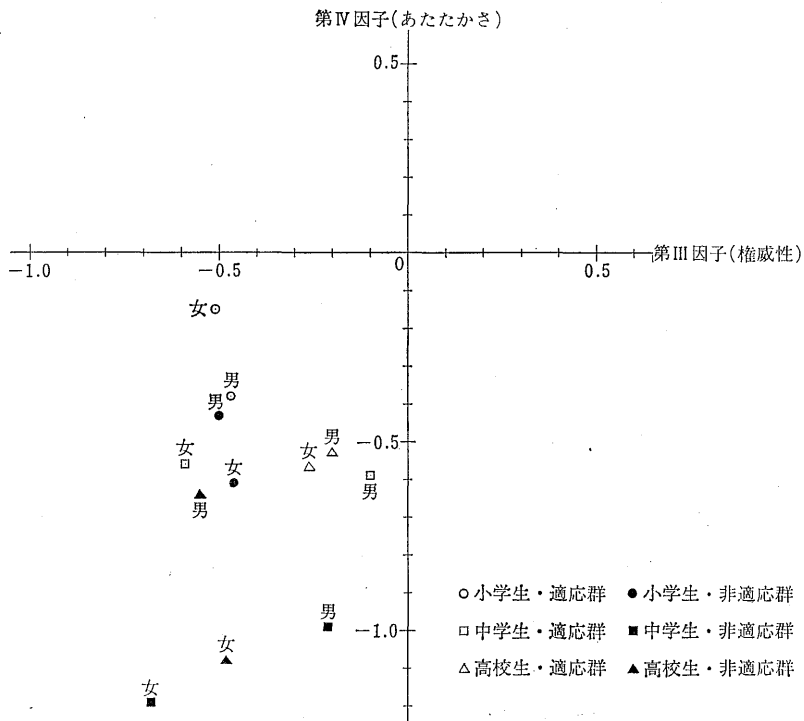


Fig. 6 「私」のイメージの平面布置（第III因子×第IV因子）

(1) 「父」のイメージ

小学生男子では、適応群は「父」をより誠実であると感じ、非適応群は「父」をより権威的であると感じている。中学生の男女と高校生女子では非適応群の方が「父」をより明るくないと感じている。小学生女子と高校生男子では、適応群と非適応群の間に「父」に対するイメージには有意差が認められない。

(2) 「母」のイメージ

小学生男子では、適応群は「母」をより誠実であると感じ、非適応群は「母」をより権威的であると感じている。小学生女子と中学生男子では、適応群は「母」をより誠実であると感じ、非適応群は「母」をより明るくないと感じている。中学生女子では、適応群は非適応群よりも「母」をより明るいと感じている。高校生では男女とも、適応群と非適応群の間に「母」に対するイメージには有意差が認められない。

(3) 「好きな先生」のイメージ

小学生男子と中学生女子では、適応群の方が「好きな先生」をより明るいと感じている。中学生男子では、適応群は非適応群よりも「好きな先生」をより誠実であると感じている。小学生女子と高校生の男女では適応群と非適応群の間に「好きな先生」に対するイメージには有意差が認められない。

(4) 「同性の友だち」のイメージ

小学生男子では、非適応群の方が「同性の友だち」をより誠実でないと感じている。中学生男子では、適応群は「同性の友だち」をより権威的でないと感じ、非適応群は「同性の友だち」をより誠実でないと感じている。中学生女子では、適応群は非適応群よりも「同性の友だち」をより明るいと感じている。小学生女子と高校生の男女では、適応群と非適応群の間に「同性の友だち」に対するイメージには有意差が認められない。

(5) 「私」のイメージ

小学生男子と中学生男子では、適応群は自己をより明るいと感じており、非適応群は自己をより誠実でないと感じている。小学生女子では、非適応群は自己をより誠実でなく、あたたかくないと感じている。中学生女子では、適応群は自己をより明るいと感じ、非適応群は自己をより誠実でなく、あたたかくないと感じている。高校生男子では、非適応群は自己をより明るくないと感じている。高校生女子では、適応群は自己をより明るいと感じ、非適応群は自己をよりあたたかくないと感じている。

これまで臨床的研究等を通して自己概念が適応状態と関連をもつことが指摘されているが、本研究でも「私」のイメージにおいて適応群と非適応群の間に最も多くの有意差が現われている。そこで適応群と非適応群の「私」のイメージの因子得点を2次元平面上に図示してみた。Fig. 5 は第I因子を横軸、第II因子を縦軸にと

り、Fig. 6 は第III因子を横軸、第IV因子を縦軸にとって各グループの因子得点をプロットしたものである。

これらの図をみると、Fig. 5 では高校生男子の適応群を除くと、適応群と非適応群とはっきりと2つのグループに分かれている。適応群の特徴は〈明朗性〉の因子得点が高いことであり、非適応群の特徴は〈誠実性〉の因子得点が高いことである。次に、Fig. 6 でも適応群と非適応群は一応2つのグループに分けることができるが、その分離の程度は大きくない。適応群の方が〈権威性〉においても〈あたたかさ〉においてもその因子得点が非適応群よりも少し高く、その結果、2次元平面上において適応群の方が原点に近く配置されているといった程度である。従って、適応群と非適応群は〈誠実性〉と〈明朗性〉の2軸によって構成される平面上においてよく分離されるといえよう。

以上をまとめると、適応群と非適応群の対人イメージの差は〈誠実性〉と〈明朗性〉において多くみられ、適応群の方が誠実で、明朗な対人イメージを持っている。しかもこの傾向は自己イメージにおいて最も顕著に認められる。〈権威性〉と〈あたたかさ〉においては適応群と非適応群の間にあまり有意差がみられないが、小・中・高校生の女子においては非適応群は適応群よりもあたたかくないという自己イメージを持っている。

考 察

本研究によって、青少年の対人イメージには、発達段階や性別による違いや、イメージの対象による違いがあることがわかった。まず「父」に対するイメージの特徴は、小・中・高校生とも権威的とみていることである。このイメージは「父」に対するイメージとしては予測されうるものであり、当然な結果とも考えられよう。またその権威的というイメージが、中学、高校と進むにつれて強くなるのも、青年の自我や独立心や批判精神の発達を考えればうなずけるものである。その他、「父」に対するイメージでは、小学生の段階ではあたたかいとか誠実であるというプラスのイメージが持たれているが、高校生になるとそのようなプラスのイメージが消え、代わって明るくないというマイナスのイメージが現われているのが特徴である。このようなプラスのイメージからマイナスのイメージへの変化は「母」に対するイメージでもみられるが、単にイメージのみの変化でなく、親子関係の変化を反映していると考えられることもできよう。

「母」に対するイメージの特徴としては、今述べたプラスのイメージからマイナスのイメージへの変化の他に、〈あたたかさ〉因子においてははっきりとした男女差がみられる。すなわち、男子は母にそれほどあたたかさを感じていないが、女子は小・中・高校生ともあたたかさを感じている。この〈あたたかさ〉の因子負荷量が

高い項目は「あたたかい一つめたい」、「すきな一きらいな」、「思いやりのある自分勝手な」であり、いずれも対人的魅力に関係する項目である。女子にとって母親の魅力性が高いという結果は、女子の生活空間の中で母親が重要な地位を占めていることを示し、さらに母親関係の良好さを示唆するものであろう。

「すきな先生」に対するイメージの特徴は、女子のイメージは比較的良いイメージであるのに、男子のイメージは必ずしも良いイメージとはいえないことである。特に中・高校生の男子のイメージはあまり良いとはいえないが、その内容は中学生と高校生で異なっている。中学生男子のイメージの特徴は、「すきな先生」を権威的だと感じている点であり、高校生男子のイメージの特徴は、「すきな先生」を明るくないと感じている点である。中学生男子が「すきな先生」を権威的とみるのは、きびしい先生を求める欲求の表れと捉えることもでき、その意味では問題があるというよりはむしろ成長を示す結果であるかもしれない。また、高校生男子の「すきな先生」に対する明るくないというイメージには問題があるが、この場合も深刻さを求める青年期の特徴を示すものであるかもしれない。

「すきな先生」を思い浮かべる場合、理想の水準からみるか、実際にいる教師の中から選ぶかによってイメージの内容は異なってくるであろう。この場合、実際の教師の中から選んでいるものと考えられるが、本研究ではそのようなことも含めてイメージを規定する要因を十分明らかにすることができなかった。今後の研究において解明すべき問題である。また女子の小・中・高校生を通して一貫する好ましいイメージと、男子の複雑に変化しながら発達するイメージとの対比も注目される点であり、そのような男女間の相違をもたらす要因についても今後明らかにすることが必要である。

「同性の友だち」に対するイメージの一般的特徴は、明るく、権威的でないという点にある。このイメージは健全な友人関係を示唆するものであり、イメージの上では一応好ましい結果が得られたといえよう。しかし〈誠実性〉の面では因子得点が高くなく、特に高校生男子では非常に低くなっている。青年の人格形成において友人関係の果たす役割を考えたとき、相手に誠実さを感じられない友人関係には大きな期待をかけられないであろう。高校生の時期は友人関係が特に大切な時期であるので、ここに得られた結果について今後さらに分析することが必要と考えられる。

「私」のイメージの特徴は、〈誠実性〉、〈権威性〉、〈あたたかさ〉のいずれにおいても因子得点が一般的に低くなっている点と、〈明朗性〉においては小学生の男女と中学生女子の因子得点は高く、高校生男子の因子得点は低くなっている点である。このように自己イメージ

は、他者に対するイメージと比べると、評価が低くなっているのが特徴である。また小学生や中学生女子が自己を明るいとみているのと同様に、高校生男子が自己を明るくないとみているのは、父母やすきな先生に対するイメージと併せて考えてみると、高校生男子の自己や他者に対する不満の強さを推測させるものといえよう。この結果は、高校生男子のおかれている状況と関連させて考える必要がある。

適応群と非適応群の間に差がみられたのは〈誠実性〉と〈明朗性〉であり、〈権威性〉や〈あたたかさ〉ではあまり差がみられなかった。適応群の方が自己や他者を誠実で、明るいとみており、しかもその傾向が自己イメージにおいて顕著であるという結果は、従来の自己概念に関する研究成果とも一致しており、妥当な結果といえよう。さらに女子の自己イメージにおいては、小・中・高校生とも適応群の方が自己をあたたかみとみているが、これは男子にはみられない結果である。〈あたたかさ〉の因子は魅力性に関係する因子であることはすでに述べたが、自己をあたたかみとみられるかどうか、自己に魅力を感じることができるかどうか女子における適応と関連するという事実は興味深い結果であり、女子青年と男子青年の違いを考える上で参考になるものと考えられる。

要 約

本研究では、「父」、「母」、「すきな先生」、「同性の友だち」、「私」の5つの概念について、青少年の対人イメージを測定し、その特徴を検討した。

対人イメージの測定には21対の形容詞対を用い、因子分析によって〈誠実性〉、〈明朗性〉、〈権威性〉、〈あたたかさ〉の4因子を抽出した。さらにこれらの各因子の因子得点を算出し、因子得点によって対人イメージの特質を検討した。

主な結果は以下の通りである。

- (1) 父については、小・中・高校生とも権威的であるというイメージが一般的であり、発達の的には中学、高校と進むにつれてその傾向が強まる方向を示している。
- (2) 母については、女子では小・中・高校生ともあたたかいというイメージがみられ、女子にとっての母の魅力性の高さや、重要さが示されている。男子においては、小学生では誠実というイメージが強く、中・高校生では明るくないというイメージが強い。男子では中学、高校と進むにつれて、母に対するイメージはマイナスの方向へ変っている。
- (3) すきな先生については、女子には小・中・高校生とも誠実というイメージがみられるが、男子には一貫したイメージがみられない。小学生男子では誠

実、中学生男子では権威的、高校生男子では明るくないというイメージが強く、複雑な発達の变化を示している。

- (4) 同性の友達については、明るく、権威的でないというイメージが比較的一貫してみられるが、中・高校生の男子においては誠実でないというイメージもみられ、問題となる傾向が示されている。
- (5) 自己については、小・中・高校生とも誠実でなく、権威的でなく、あたたかくないというイメージが一般的にみられる。その他、小学生の男女と中学生の女子には明るいというイメージが、高校生の男子には明るくないというイメージがみられる。特に高校生男子における問題点が指摘される。
- (6) 適応群は一般的に非適応群よりも誠実で、明るいという内容の対人イメージをもっており、その傾向は特に自己イメージにおいて顕著に現われている。また女子においては、小・中・高校生とも適応群の自己イメージは非適応群よりもあたたかいというイメージで、男子と異なる特徴がみられる。

引用文献

- Gault, U., & Wang, A. M. 1974 Cultural variations in British and Australian personality differentials. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, **13**, 37-40.
- 加藤隆勝・高木秀明・堀啓造 1980 現代っ子の教師観 教育心理, **28**, 377-385.
- 加藤隆勝・石川透・田中祐次・落合良行・高木秀明・堀啓造 1981 a 現代青少年の人間関係と適応感(1)~(5) 日本教育心理学会第23回総会発表論文集, 566-575.
- 加藤隆勝・石川透・田中祐次・落合良行・高木秀明・堀啓造 1981 b 現代青少年の人間関係——親子関係・教師生徒関係・友人関係の特質と生活感情—— 伊藤忠記念財団調査研究報告書 **6**.
- Kuusinen, J. 1969 Affective and denotative structures of personality ratings. *Journal of Personality and Social Psychology*, **12**, 181-188.

長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎・斎藤耕二・堀洋道 1966 自我と適応の関係についての研究(1) 東京教育大学教育学部紀要, **12**, 85-106.

長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎・斎藤耕二・堀洋道 1967 自我と適応の関係についての研究(2) 東京教育大学教育学部紀要, **13**, 59-83.

大橋教育研究会 1979 子どもの生きがいと悩み 調査報告.

Osgood, C. E. 1952 The nature and measurement of meaning. *Psychological Bulletin*, **49**, 197-237.

Osgood, C. E. 1962 Studies on the generality of affective meaning system. *American Psychologist*, **17**, 10-28.

Osgood, C. E., & Luria, Z. 1954 A blind analysis of a case of multiple personality using the semantic differential. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **49**, 579-591.

Osgood, C. E., May, W. H., & Miron, M. S. 1975 *Cross-cultural universals of affective meaning*. Urbana, Illinois: University of Illinois Press.

鈴木真理子 1974 児童用 Self-Differential Scale の作製. 教育心理学研究, **22**, 171-175.

田中祐次 1971 児童用 Personality-Differential Scale の作製 日本教育心理学会第13回総会 発表論文集, 84-85.

Warr, P. B., & Haycock, V. 1970 Scales for a British personality differential. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, **9**, 328-337.

〔後記〕

本研究は伊藤忠記念財団の助成によって行われた「現代青少年の人間関係——親子関係・教師生徒関係・友人関係の特質と生活感情——」(1981 b) の対人イメージのデータを用いて因子分析的考察を行ったものである。共同研究者であった静岡大学の石川透教授、落合良行助教授、文教大学の田中祐次教授のご好意に対し厚くお礼申しあげる。

—1981年10月10日 受稿—

SUMMARY**Factorial Characteristics of the Interpersonal Image
in Children and Adolescents.**

Takakatsu Kato
The University of Tsukuba

Keizo Hori
Nagaoka Junior College

Hideaki Takagi
Yokohama National University

The purpose of this study was to investigate developmental changes and their differences by sex in five kinds of interpersonal images. The subjects were 403 schoolchildren, 362 junior high school students, and 250 senior high school students.

Images of the father, the mother, a likable teacher, a friend of the same sex, and the self were measured by 21 adjective pairs. The subjects' responses were factor-analyzed by principal component solution with normal varimax rotation. Four factors were found, and were named as "sincerity" (Factor I), "cheerfulness" (Factor II), "authority" (Factor III), and "warmth" (Factor IV). Interpersonal images were examined in terms of factor scores.

The following results were obtained:

(1) Regardless of age and sex, the image of the father was characterized by "authority" and this tendency increased with age for both sexes.

(2) In females the image of the mother was characterized by "warmth" regardless of age, while in schoolboys it was characterized by "sincerity", and in male junior and senior high school students, by lack of "cheerful-

ness".

(3) The image of a likable teacher was characterized by "sincerity" in all females and in schoolboys, by "authority" in male junior high school students, and by lack of "cheerfulness" in male senior high school students.

(4) The image of a friend of the same sex was characterized by "cheerfulness" and lack of "authority" regardless of age and sex, and, in addition, by lack of "sincerity" in male junior and senior high school students.

(5) The image of the self was characterized by lack of "sincerity", "authority", and "warmth" regardless of age and sex. In addition, the self was characterized as cheerful in schoolchildren and female junior high school students and as not cheerful in male senior high school students.

(6) Over all, the interpersonal images tended to be characterized by "sincerity" and "cheerfulness" in adjusted subjects more than in unadjusted subjects. This tendency was more marked in the image of the self, which was further characterized by "warmth" in adjusted females than in unadjusted females.